HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	満洲語現代方言の強勢とピッチについて
Author(s)	王, 海波
Citation	北方言語研究, 11, 153-165
Issue Date	2021-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/97223
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80940
Type	departmental bulletin paper
File Information	NoLS11_03_153_HaiboWANG.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 11: 153-165（日本北方言語学会 2021）

満洲語現代方言の強勢とピッチについて

王　海 波
（嶺南師範学院）

キーワード：満洲語、強勢、ピッチ

1. はじめに

1.1. 満洲語の概要

満洲語は満洲・ツングース系の言語であり、元々清国（1616-1912）を建てた満洲族の言語である。満洲語の古典語は 17 世紀から 18 世紀末にかけて清国で使用された満洲語を指す。本稿で扱う満洲語三家子方言と黒河方言[1]は、現在中国黒龍江省チチハル市富裕県三家子屯と同省黒河市で話される満洲語の方言である。また、本稿で扱う満洲語シベ方言[2]は、現在中国新疆ウイグル自治区のチャプチャル（察布査爾）シベ自治県と霍城県イチャガシャン（伊車嘎善）郷で話される満洲語の方言である。

1.2. 本稿の目的

拙論 Wang Haibo (2013)では、満洲語三家子方言の強勢とピッチについて考察することで、音節間における母音のソノリティの差異または音節の子音化により強勢の移動が発生することがあるが、各音節の相対的なピッチの差異が強勢の移動に伴って変化することはないため、強勢が来る音節（以下、強勢音節と呼ぶ）が低いピッチで現れることがある、という結論を出した。しかし、Wang Haibo (2013)では三家子以外の満洲語の方言（黒河方言・シベ方言）の強勢とピッチについては扱っていない。また、強勢音節のピッチが弁別的な要素になりえるかについて考察する必要がある。そこで、本稿では三家子方言のみならず、黒河方言とシベ方言についても扱うことにする。また、強勢の移動による強勢音節のピッチの差異の弁別性についても考察することにする。

2. 強勢音節のピッチ

満洲語は強さアクセント（ストレス、強勢）を持っている。満洲語の強勢音節は、話し手がより多くのエネルギーを使って発しており、発音が長く、強度が高い。また、強勢音節のピッチは原則として高いピッチから始まるが、強勢の移動により、低いピッチから始まる場

[1] 三家子方言には次のような音素と異音があると考えられる。/p/ [pʰ], /b/ [p ~ b], /m/ [m], /f/ [ɸ], /t/ [tʰ], /d/ [t ~ d], /n/ [n ~ ɲ], /s/ [s ~ z ~ ɕ ~ t͡sʰ], /š/ [ʂ ~ ʐ], /c/ [t͡ʂʰ ~ t͡ɕʰ], /j/ [t͡ʂ ~ t͡ɕ ~ d͡ʐ̟ ~ d͡ʑ], /l/ [l ~ ɹ ~ l̠ ~ ɾ], /k/ [kʰ ~ qʰ ~ x ~ χ], /g/ [k ~ g ~ q ~ ɢ], /ŋ/ [ŋ], /x/ [x ~ χ ~ ɣ ~ ʁ], /N/ [◌̃ ~ n ~ m ~ ŋ ~ ɴ ~ ɲ], /y/ [j, ʲ], /w/ [β̞ ~ ʷ], /i/ [i ~ (ʲ)ɐ], /u/ [u ~ y ~ ɔ], /e/ [ɤ ~ ɐ ~ ɯ ~ ɨ], /a/ [a ~ ɛ], /o/ [ɔ]。黒河方言の音素と異音は三家子方言のものと類似する。ただし、黒河方言の母音音素 /o/ は、[ɔ] の他に [œ] という異音もある。

[2] シベ方言には次のような音素と異音があると考えられる。/p/ [p(ʰ)], /b/ [b ~ p(ʰ)], /m/ [m], /f/ [f], /t/ [t(ʰ)], /d/ [d ~ t(ʰ)], /n/ [n ~ ɲ], /s/ [s ~ z ~ ɕ ~ ʑ], /š/ [ʂ ~ ʐ], /c/ [t͡ʂ(ʰ) ~ t͡ɕ(ʰ) ~ ʂ ~ ɕ], /j/ [d͡ʐ̟ ~ d͡ʑ ~ t͡ʂ(ʰ) ~ t͡ɕ(ʰ) ~ ʂ ~ ɕ], /l/ [l ~ ɹ ~ l̠], /r/ [ɾ ~ r], /k/ [k(ʰ) ~ q(ʰ)], /g/ [g ~ k(ʰ)], /ŋ/ [ŋ ~ ɴ], /x/ [x ~ ɣ], /q/ [q(ʰ) ~ χ], /ɢ/ [ɢ], /χ/ [χ ~ ʁ], /N/ [◌̃ ~ n ~ m ~ ŋ ~ ɴ ~ ɲ], /y/ [j, ʲ], /w/ [v ~ ʷ ~ ʊ ~ w ~ f], /i/ [i], /u/ [u ~ y], /e/ [ɜ ~ ɤ ~ ɯ ~ ɨ], /a/ [a ~ ɛ], /o/ [ɔ ~ ø ~ œ]。

合もある[3]（詳細は第 4 節を参照されたい）。次では高いピッチから始まる強勢音節と低いピッチから始まる強勢音節の例を見よう。

[1] 高いピッチから始まる強勢音節

満洲語の語の強勢音節のピッチは、ほとんどの場合、高いピッチで始まる。具体的には、次の 2 つのパターンがある。ここの F と H は音声的なラベルである。

(1) (a) F [˥˩] 下降
(b) H [˥] 高くて平らなピッチ

高いピッチから始まる強勢音節が音声的に最後の音節である場合、そのピッチは F と H のどちらもあり得る。例えば次のような場合がある。

(2) 三家子 jixa [t͡ɕiɹ.ˈʁaː˥˩] ~ [t͡ɕiɹ.ˈʁaː˥] 「お金」
黒河 jixa [t͡ɕiɹ.ˈʁaː˥˩] ~ [t͡ɕiɹ.ˈʁaː˥] 「お金」
シベ jiχa [d͡ʑiɹ.ˈʁaː˥˩] ~ [d͡ʑiɹ.ˈʁaː˥] 「お金」

一方、高いピッチから始まる強勢音節は音声的に最後の音節以外の音節である場合、そのピッチは常に H であり、F になることはない。例えば、次の例では、高いピッチが 1 音節目に位置するが、1 音節目は音声的に最後の音節ではない。この場合の強勢音節のピッチは常に H であり、F になることはない。

(3) 三家子 je-ke [ˈt͡ʂʁː˥.kʰʁ˦] 「食べた」（食べる-完了） ([ˈt͡ʂʁː˥˩.kʰʁ˦] ではない)
黒河 je-ke [ˈt͡ʂʁː˥.kʰʁ˦] 「食べた」（食べる-完了） ([ˈt͡ʂʁː˥˩.kʰʁ˦] ではない)
シベ je-ke=i [ˈd͡ʐɨː˥.kʰij˦][4]「食べた」（食べる-完了=モダリティ） ([ˈd͡ʐɨː˥˩.kʰii˦] ではない)

[2] 低いピッチから始まる強勢音節

強勢音節は低いピッチで始まる場合もある。例えば、次の三家子方言とシベ方言の「知らせる」の意味の語は、複数の発音がありえるが、そのうちの一部の発音では低いピッチから始まる強勢音節が見られる。低いピッチから始まる強勢音節は強勢の移動によると考えられる（第 4 節を参照）。

(4) 三家子 ale-mi [aɹ.ˈlɨm˥] ~ [ˈaːɹ.lɨm˦] 「知らせる」（知らせる-未完了）
シベ ale-mi [aɹ.ˈlɨm˥] ~ [ˈaːɹ.lɨm˦] ~ [aɪːmʌ(˦)] 「知らせる」（知らせる-未完了）

3. 高いピッチから始まる強勢音節

3.1. 三家子方言の場合

三家子方言では、高いピッチから始まる強勢音節の位置は次のようである。

三家子方言の 2 音節語は、2 音節目が開音節である場合、2 音節目の母音が a であれば、

[3] 発音の長さ(duration)と強度(intensity)とピッチ(pitch)はスペクトグラム(spectrogram)で測定可能である。
[4] je-ke に対応するシベ方言の例は je-ke [d͡ʐɨkʰ˥(˦)] であり、語末の e は音声的に消える（脚注 8 および Kubo 2008 を参照されたい）。すなわち、je-ke は音声的には 1 音節のみであり、この場合の例にはなり得ない。従って、je-ke [d͡ʐɨkʰ˥(˦)] の代わりに je-ke=i [ˈd͡ʐɨː˥.kʰɨj˦] の例を挙げた。

強勢が常に 2 音節目に来る（例えば次の(5)）が、2 音節目の母音が a 以外の母音（o, e, u, i）であれば、強勢が 1 音節目に来る語と 2 音節目に来る語のどちらもある（例えば次の(6)）。2 音節目の母音が a 以外の母音である場合、強勢音節の位置によって意味が異なる場合があり、強勢音節の位置によるミニマルペアと見なせる（例えば次の(6a)と(6b)、(6c)と(6d)、(6g)と(6h)）。a 以外の母音で終わる 2 音節語で、強勢が 2 音節目に来る場合、2 音節目の母音の上にアキュート・アクセント記号を用いて強勢がその母音の音節に来ることを示す（例えば次の(6b)(6d)(6f)(6h)）。

(5)　(a) bila [piˈla:]「川」　　(b) suNja [suŋˈd͡ʑa:]「5」

(6)　(a) elde [ˈɤɪdɤ]「早い」　　(b) eldé [ɯɪˈdɤ:]「朝」
　　(c) ici [ˈi:t͡ɕʰi]「右」　　(d) icí [iˈt͡ɕʰi:]「新しい」
　　(e) uju [ˈu:d͡ʑɔ]「頭」　　(f) mukú [muˈkʰu:]「水」
　　(g) oNco [ˈɔɳt͡ʂʰɔ]「異なる」　　(h) oNcó [ɔɳˈt͡ʂʰɔ:]「幅が広い」

三家子方言の 2 音節語は、2 音節目が閉音節である場合、強勢が常に 2 音節目にある。

(7)　(a) eyliN [eˈlin]「時間」　　(b) ušuN [uˈʐun]「畑」

三家子方言の 3 音節以上の語は、ほとんどの場合、強勢が 2 音節目に来る（例えば次の(8)）が、3 音節目に来る語も稀にある（例えば次の(9)）。強勢が 4 音節目以降に来る語は筆者の調査では観察されない。

(8)　(a) jiwaili [t͡ɕiˈβ̞ajle]「2 個」　　(b) feynixe [ɸeˈɲi:ɣɤ]「髪」
　　(c) ilawaili [iˈla:β̞ajle]「3 個」　　(d) yadušu-xu [jaˈdu:ʐuɣɔ]「飢えた」（飢える-完了）

(9)　ajilxaN [ad͡ʑilˈʁan]「雄馬」

3.2. 黒河方言の場合

黒河方言では、高いピッチから始まる強勢音節の位置は弁別の機能がないようである。河野（1944=1979: 545）は黒河方言の強勢は一般に第 1 音節に置かれると記述している。一方、筆者の調査では、黒河方言は基本的にどの語についても 1 音節目に強勢音節が来る発音が許容されるが、1 音節目と 2 音節目の間で揺れる例もある。

(10)　(a) ele [ˈɤ:lɤ] ~ [ˈɤ:ɾɤ]「これ」　　(b) aNba [ˈamba] ~ [amˈba:]「大きい」
　　(c) ale-mi [ˈa:lɤmʲe]「教える」　　(d) bila [ˈpi:la] ~ [piˈla:] ~ [ˈpi:ɾa] ~ [piˈɾa:]「川」
　　(e) xamte-mi [ˈχamtʰɤmʲe]「大便する」　　(f) jiwaili [ˈt͡ɕi:β̞ajle] ~ [t͡ɕiˈβ̞ajle]「2 個」

3.3. シベ方言の場合

シベ方言では、高いピッチから始まる強勢音節は原則として最後の音節である。

(11)　(a) yila [jɪˈla:]「止まれ」　　(b) doχuluN [dɔʁʊˈlun[5]]「びっこ」

[5] 語末の N は [n] の他に、直前の母音を鼻母音にするという異音もある（久保ほか 2011: 6）。スペースの関係で本論では後者の発音を省略した。

ただし、複数音節の語の語末が高母音音素（i, e, u）[6]である場合、語末音節が強勢を受ける語と受けない語がある[7]。強勢を受ける場合はその高母音が音声的に消えず、強勢がその音節に来る（例えば、次の 12(a)）。一方、強勢を受けない場合はその高母音が消えて[8]、強勢がその前の音節に来る（例えば、次の 12(b)）。この場合、アキュート・アクセントを用いて強勢がその音節に来ることを示す。

(12) (a) dexamé [dɜɣaˈmɜː]「母の姉妹の夫」 (b) jirame [d͡ʑiˈram]「厚い」

高母音音素で終わる 2 音節語は、強勢音節の位置によって意味が異なる場合がある。このような場合、強勢音節の位置によるミニマルペアと見なせる。次の(13)(14)は久保ほか（2011: 15, 19）が挙げた例である。(15)(16)(17)は筆者の調査で観察された例である。

(13) (a) muku [mukʷʰ] 「羊の踝の骨で作った骰子の 1 つの面の名前」 (b) mukú [muˈkʰuː]「水」

(14) (a) cixe [t͡ɕʰix]「湿気」 (b) cixé [t͡ɕʰiˈɣɜː]「蚤」

(15) (a) sisxe [ɕisx]「小麦粉等のふるい」 (b) sisxé [ɕisˈxɜː]「敷き布団」

(16) (a) χasi [χaɕ][9]「まだ」 (b) χasí [χaˈʑiː]「茄子」

(17) (a) erde [iɾt]「早い」 (b) erdé [iɾˈdɜː]「朝」

また、筆者の調査では、シベ方言の異なる下位方言（チャプチャル方言とイチャガシャン方言）によって、高母音音素で終わる 2 音節語の語末の高母音音素が強勢を受ける場合と受けない場合がある、という現象の例が観察された。

(18) (a) チャプチャル方言 yixé [jɪˈɣɜː] 「鴨」[10]
(b) イチャガシャン方言 yixe [jɪx] 「鴨」

動詞語幹に完了接辞 {-xe} とモダリティ接語 =i がつく場合、例えば ji-xe=i「来た」の場合、強勢が音声的に語末にある音節の xei に来るのが普通のはずであるが、実際、強勢が音声的に語末から 2 音節目[11]（ji-xe=i の場合は ji）に来る場合の方が普通である（すなわち、[ˈd͡ʑiːɣɨj] のような発音の方が頻度が高い）[12]。また、完了相否定の -xaqu=i の場合、例えば

[6] シベ方言の高母音音素は i, e, u であり、低母音音素は a, o である（Kubo 2008）。
[7] 久保ほか（2011: 10）も語末の i, e, u に限って強勢があるかないかの区別があると記述している。
[8] 該当する高母音が音声的に消えるが、音韻的にはその母音が存在する。これに関しては形態論的操作でその母音が出現するなどの理由があり、詳細は Kubo (2008)を参照されたい。
[9] χasi は中国語の「還是」からきている。χasigele ともいう（gele は「もまた」の意味の固有語である）。
[10] チャプチャルのシベ方言の複合語 coqu yixe [ˈt͡ʂʰɔqʷʰ ˈjɪx]「鶏と鴨」では、coqu の部分と yixe の部分のどちらにも強勢があり、それぞれの 1 音節目にある。この複合語における「鴨」の強勢は 1 音節目にある。しかし「鴨」が単独で使われる場合、強勢が 2 音節目に来る（yixé [jɪˈɣɜː]）。一方、イチャガシャンのシベ方言では「鴨」が単独で使われる場合（複合語でない場合）でも、強勢が 1 音節目に来る（yixe [jɪx]）。
[11] ここの「語末から 2 音節目」は音声的レベルの話である。例えば、gene-xe=i [gɜnɣii]「行った」の例では、-xe の前の e は音声的に現れない（その理由は Kubo 2008: 134-136 を参照されたい）。従って、「語末から 2 音節目」というのは、その前の音節、すなわち [gɜn] のことである。
[12] この現象について久保ほか（2011a）は「最後から 2 番目のモーラが高くなる」が、「完了終止形の /-Xei/ は、(2 モーラだが、) その直前が高くなるパターンもある」と記述している。しかし、最後の音節は 2 モーラであるが、そのピッチは F の他に H もあり得る（(2)を参照）。すなわち、最後から 1 番目のモーラも高い可能性がある。また、-xe=i のみならず、-xaqu=i, -ma=i の場合も、最後の 2 モーラのどちらも低い場合が

ji-xaqu=i は、[d͡ʑiɣaˈqʰʊj] と [d͡ʑiˈɣa:qʰʊj] のどちらも許容度が高い。進行相を表す表現の 1 つである -ma=i の場合、例えば taci-ma=i は、[tʰat͡ɕʰiˈmaj] が普通であるが、一部の話者は [tʰaˈt͡ɕʰi:maj] も許容する。

(19a)　ji-xe=i「来た」　[d͡ʑiˈɣij] 頻度低　[ˈd͡ʑi:ɣij] 頻度高
(19b)　ji-xaqu=i「来ていない」　[d͡ʑiɣaˈqʰʊj] 頻度高　[d͡ʑiˈɣa:qʰʊj] 頻度高
(19c)　taci-ma=i「勉強している」　[tʰat͡ɕʰiˈmaj] 頻度高　[tʰaˈt͡ɕʰi:maj] 一部の話者は許容

上記の場合を除いても、稀に例外がある。例えば、次の語は強勢が 1 音節目にある。この語は [ˈgu:ɭ.ɣunɬ] のような発音であり、*[guɹ.ˈɣunɭ(ɬ)] のような発音は筆者が調査した話者は許容しない。

(20) guxuN [ˈgu:ɣun]「明るい」

4. 低いピッチから始まる強勢音節

低いピッチから始まる強勢音節は常に 1 音節目であり、強勢の移動によるものと考えられる。この強勢の移動は音節の子音化[13]による場合とよらない場合がある。次ではこの 2 つの場合について考察する。

4.1. 音節の子音化によらない強勢の移動

先に音節の子音化によらない強勢の移動についてみる。三家子方言とシベ方言のどちらにおいても、高いピッチから始まる強勢音節が 2 音節目である場合がある。例えば、次のような例がある。

(21)　三家子　jaleN [t͡ʂaɹ.ˈlinɭ(ɬ)]「世代」
　　シベ　jaleN [d͡ʐaɹ.ˈlɪnɭ(ɬ)]「世代」

一方、このような語は、強勢の位置が 1 音節目に移動することがある。但し、この強勢の移動は、1 音節目と 2 音節目の間の相対的なピッチの変化を伴わない。例えば、(22)からわかるように、三家子方言の jaleN とシベ方言の jaleN は 1 音節目が強勢音節になることがあるが、ピッチは高くならない。また、その場合、2 音節目のピッチはやや低くなるが、やはり 1 音節目と比べて相対的に高い。この強勢の移動は、[ˈt͡ʂa:ɭ.linɬ] と [ˈd͡ʐa:ɭ.lɪnɬ] のような発音をもたらすわけではない。

(22)　三家子　jaleN [t͡ʂaɹ.ˈlinɭ(ɬ)] ~ [ˈt͡ʂa:ɹ.linɬ]「世代」　([ˈt͡ʂa:ɭ.lɯnɬ] はない)
　　シベ　jaleN [d͡ʐaɹ.ˈlɪnɭ(ɬ)] ~ [ˈd͡ʐa:ɹ.lɪnɬ]「世代」　([ˈd͡ʐa:ɭ.lɪnɬ] はない)

すなわち、強勢の移動が音節間の相対的なピッチの変化を伴わないことで、低いピッチから始まる音節にも強勢が来ることがある。

ある（(19)を参照）。

[13] 本稿における「音節の子音化」は音節における母音がなくなり、音節全体が子音になるという意味で用いられている。

4.1.1. 三家子方言の場合[14]

三家子方言では、強勢の移動の有無は 1 音節目と 2 音節目の母音の性質に関係するようである。具体的には、次の例をみよう。

三家子方言の bele [ˈpɤːɭ.lɤɬ]「米」は、対格接語 =be の付与で bele=be [pɤɹ.ˈlɤːɭ.bɤɬ]「米を」になる。[ˈpɤːɹ.lɤɬ.bɤɬ] のような発音はほとんど観察されない。一方、1 音節目の母音が a である場合、例えば、yaxe [ˈjaːɭ.ʁɤɬ]「火」は、対格接語が付与されると、yaxe=be [ˈjaːɹ.ʁɤɬ.bɤɬ]「火を」のような形式が普通である。[ˈjaːɹ.ʁɤɬ.bɤɬ] は [jaɹ.ˈʁɤːɭ.bɤɬ] より頻度が圧倒的に高い。

(23) bele=be「米を」 [pɤɹ.ˈlɤːɭ.bɤɬ] 頻度高 [ˈpɤːɹ.lɤɬ.bɤɬ] 頻度低
yaxe=be「火を」 [jaɹ.ˈʁɤːɬ.bɤɬ] 頻度低 [ˈjaːɹ.ʁɤɬ.bɤɬ] 頻度高

三家子方言の bene [ˈpɤːɭ.nɤɬ]「送れ」は、完了接辞の付与で bene-xe [pɤɹ.ˈnɤːɭ.ɣɤɬ]「送った」になる。[ˈpɤːɹ.nɤɬ.ɣɤɬ] のような発音はほとんど観察されない。一方、1 音節目の母音が a である場合、例えば、ace [ˈaːɭ.t͡ʂʰɤɬ]「会え」に完了接辞が付与されると、ace-xe [ˈaːɹ.t͡ʂʰɤɬ.ʁɤɬ]「会った」のような形式が普通である。[ˈaːɹ.t͡ʂʰɤɬ.ʁɤɬ] は [aɹ.ˈt͡ʂʰɤːɭ.ʁɤɬ] より頻度が圧倒的に高い。

(24) bene-xe「送った」 [pɤɹ.ˈnɤːɭ.ɣɤɬ] 頻度高 [ˈpɤːɹ.nɤɬ.ɣɤɬ] 頻度低
ace-xe「会った」 [aɹ.ˈt͡ʂʰɤːɭ.ʁɤɬ] 頻度低 [ˈaːɹ.t͡ʂʰɤɬ.ʁɤɬ] 頻度高

[ˈjaːɹ.ʁɤɬ.bɤɬ] と [ˈaːɹ.t͡ʂʰɤɬ.ʁɤɬ] は、もともと [pɤɹ.ˈlɤːɭ.bɤɬ] と [pɤɹ.ˈnɤːɭ.ɣɤɬ] と同じパターンの [jaɹ.ˈʁɤːɭ.bɤɬ] と [aɹ.ˈt͡ʂʰɤːɭ.ʁɤɬ] の形式のみであり、[jaɹ.ˈʁɤːɭ.bɤɬ] > [ˈjaːɹ.ʁɤɬ.bɤɬ] と [aɹ.ˈt͡ʂʰɤːɭ.ʁɤɬ] > [ˈaːɹ.t͡ʂʰɤɬ.ʁɤɬ] のような変化が起こった可能性がある。3.1. で述べたように、三家子方言の 2 音節語は、2 音節目が開音節である場合、2 音節目の母音が a であれば、強勢が常に 2 音節目に来るが、2 音節目の母音が a 以外の母音であれば、強勢が 1 音節目に来る語と 2 音節目に来る語のどちらもある。この現象からわかるように、三家子方言では母音 a は他の母音より強勢を持ちやすいようである。これは母音 a が他の母音よりソノリティが高いことに関連している可能性がある。すなわち、[jaɹ.ˈʁɤːɭ.bɤɬ] > [ˈjaːɹ.ʁɤɬ.bɤɬ] と [aɹ.ˈt͡ʂʰɤːɭ.ʁɤɬ] > [ˈaːɹ.t͡ʂʰɤɬ.ʁɤɬ] のような強勢の移動が起こったのは、母音 a と他の母音の間におけるソノリティの差異による可能性がある。この点については Wang Haibo (2013)で詳しく述べている。

また、1 音節目と 2 音節目の母音が共に a である動詞語幹もある。例えば、tana-xe「見にいった」の発音は [tʰaɹ.ˈnaːɭ.ʁɤɬ] のみであり、[ˈtʰaːɹ.naɬ.ʁɤɬ] のような発音は観察されない。すなわち、tana-xe では 1 音節目の母音と 2 音節目の母音が共に a であるため、強勢の移動が起こらない。

次の(25)からわかるように、1 音節目と 2 音節目の母音が同一である場合、強勢の移動が起こらないまたはほとんど起こらない（例 25(a)(b)）が、1 音節目の母音が a であり、2 音節目の母音が a 以外の母音である場合、強勢の移動が起こりやすい（例 25(c)）。

[14] 第 2 強勢の場合にも低いピッチが現れることがあるが、本論では第 2 強勢については扱っていない。

(25)　(a)　tana-xe「見にいった」　[tʰaɹ.ˈnaːɭ.ʁɤɬ] 可能　[ˈtʰaːɹ.naɬ.ʁɤɬ] 不可能
　　(b)　bene-xe「送った」　[pɤɹ.ˈnɤːɭ.ɣɤɬ] 頻度高　[ˈpɤːɹ.nɤɬ.ɣɤɬ] 頻度低
　　(c)　ace-xe「会った」　[aɹ.ˈʧʰɤːɭ.ʁɤɬ] 頻度低　[ˈaːɹ.ʧʰɤɬ.ʁɤɬ] 頻度高

4.1.2. シベ方言の場合

シベ方言でも、前述したような強勢の移動があり、同じように強勢の移動が 1 音節目と 2 音節目の相対的なピッチの変化をもたらさない。しかし、強勢の移動の有無は 1 音節目の母音と 2 音節目の母音の性質に関わらないようである。例えば、bene-mi は [bɜɹ.ˈnɨmɭ(ɬ)] と [ˈbɜːɹ.nɨmɬ] のどちらの発音も可能である。ace-mi「会う」も同じように、[aɹ.ˈʧʰɨmɭ(ɬ)] と [ˈaːɹ.ʧʰɨmɬ] のどちらの発音も可能である。[bɜɹ.ˈnɨmɭ(ɬ)], [aɹ.ˈʧʰɨmɭ(ɬ)] のように発音するのが普通である（例 26(a)(b)）が、発話の中では [ˈbɜːɹ.nɨmɬ], [ˈaːɹ.ʧʰɨmɬ] のような形式も現れることがある（例 26(c)(d)）。

(26)　(a)　bene-mi [bɜɹ.ˈnɨmɭ(ɬ)]　「送る」
　　(b)　ace-mi [aɹ.ˈʧʰɨmɭ(ɬ)]　「会う」
　　(c)　bene-mi [ˈbɜːɹ.nɨmɬ] se-me↑[15]　「送るというの？」
　　(d)　ace-mi [ˈaːɹ.ʧʰɨmɬ] se-me↑　「会うというの？」

4.2. 音節の子音化による強勢の移動

4.2.1. 三家子方言の場合

三家子方言では、2 音節の動詞語幹の 2 音節目の頭子音が唇子音（w [β̞] または m [m]）である場合、未完了接辞 -mi が後続すると、2 音節目の母音が消えてその前後の子音が融合する。これについては、次のような例がある。

表 1：三家子方言の 2 音節語幹の動詞の命令形・完了形・未完了形

	語幹	命令形	完了形 (完了接辞がつく形式)	未完了形 (未完了接辞がつく形式)
(1)	omu-「飲む」	omu [ˈɔːɭ.mɔɬ]	omu-xu [ɔɹ.ˈmuːɭ.ʁɔɬ]	omu-mi [ɔːmʌ]
(2)	owu-「洗う」	owu [ˈɔːɭ.β̞ɔɬ]	owu-xu [ɔɹ.ˈβ̞uːɭ.ʁɔɬ]	owu-mi [ɔːmʌ]
(3)	iwi-「縫え」	iwi [ˈiːɭ.β̞eɬ]	iwi-xe [iɹ.ˈβ̞iːɭ.ɣɤɬ]	iwi-mi [iːmʌ]
(4)	yawe-「歩く」	yawi [ˈjaːɭ.β̞ɤɬ]	yawe-xe [ˈjaːɹ.β̞ɤɬ.ɣɤɬ]	yawe-mi [jaːmʌ]
(5)	bene-「送る」	bene [ˈpɤːɭ.nɤɬ]	bene-xe [pɤɹ.ˈnɤːɭ.ɣɤɬ]	bene-mi [pɤɹ.ˈnɨmɭ(ɬ)]
(6)	tiki-「上げる」	tiki [ˈtʰiːɭ.kʰeɬ]	tiki-xe [tʰiɹ.ˈkʰiːɭ.ɣɤɬ]	tiki-mi [tʰiɹ.ˈkʰimɭ(ɬ)]

上表からわかるように、(1)-(4)の未完了形（太い線で囲んだ部分）だけ、2 音節目の母音が消えてその前後の子音が融合する。(5)(6)からの類推で、(1)-(4)の未完了形は [ɔɹ.ˈumɭ], [ɔɹ.ˈβ̞umɭ], [iɹ.ˈβ̞imɭ], [jaɹ.ˈβ̞imɭ] のはずである。このような発音は話者は許容しないわけではないが、話者が自分から進んで発音する場合、やはりそれぞれ [ɔːmʌ], [ɔːmʌ], [iːmʌ], [jaːmʌ]

[15]「↑」の記号は久保ほか（2011: 12）に倣ったものである。

のような発音になる。すなわち、(1)-(4)の未完了形は、2 音節目の母音が消えてその前後の子音が融合する形式の方が普通のようである。その結果、1 音節目に強勢が来るようになる。1 音節目はもともとの低いピッチのままであるが、語末の [m] の部分のピッチは強勢が移動する前の相対的に高いピッチを保っているため、移動した後の形式は低いピッチから始まり、最後だけ高くなるようなピッチになる。上述の [ɔːmʌ̀], [ɔːmʌ̀], [iːmʌ̀], [jaːmʌ̀] のどれもこのようなピッチパターンである。

上表の(1)-(4)の語幹のどれも 2 音節目に唇子音（w [β] または m [m]）がある。また、未完了接辞は唇子音 m で始まる。従って、(1)-(4)の未完了形における子音の融合は、融合する子音のどちらも唇子音であるということに関係していると考えられる。このような子音の融合が起こっていることは、(1)と(2)の未完了形 omu-mi と owu-mi が同音の [ɔːmʌ̀] になっていることからもわかる。

なお、(4)のような場合、1 音節目に強勢が来るのは、音節の子音化という要素以外に、1 音節目と 2 音節目の母音の差異という要素も働いていると考えられる。すなわち、たとえ子音の融合が起こらなくても、1 音節目の母音と 2 音節目の母音の聞こえ度の差異により強勢が 1 音節に移動する（4.1.1. を参照）。

4.2.2. シベ方言の場合

[1] [mː] の例

シベ方言にも前述した三家子方言と同じような、唇子音の融合の現象がある。例えば、次のような例がある。

表 2：シベ方言の 2 音節語幹の動詞の命令形・完了形・未完了形

	語幹	命令形	完了形 （完了接辞がつく形式）	未完了形 （未完了接辞がつく形式）
(1)	aymi「飲む」	aymi [ɛmɭ(ɬ)]	aymi-χe [ɛmχɭ(ɬ)]	aymi-mi [ɛɻ.ˈmimɭ(ɬ)] ~ [ɛmːʌ̀(ɬ)]
(2)	owe-「洗う」	owe [ɔfɭ(ɬ)]	owe-χe [ɔfχɭ(ɬ)]	owe-mi [ɔɻ.ˈvɨmɭ(ɬ)] ~ [ɔmːʌ̀(ɬ)]
(3)	iwi-「縫う」	iwi [ifɭ(ɬ)]	iwi-xe [ifxɭ(ɬ)]	iwi-mi [iɻ.ˈvimɭ(ɬ)] ~ [imːʌ̀(ɬ)]
(4)	yawe-「歩く」	yawe [jafɭ(ɬ)]	yawe-xe [jafχɭ(ɬ)]	yawe-mi [jaɻ.ˈvɨmɭ(ɬ)] ~ [jamːʌ̀(ɬ)]
(5)	bene-「送る」	bene [bɨnɭ(ɬ)]	bene-xe [bɨnxɭ(ɬ)]	bene-mi [bɨɻ.ˈnɨmɭ(ɬ)]
(6)	tike-「上げる」	tike [tʰikʰɭ(ɬ)]	tike-xe [tʰikʰxɭ(ɬ)]	tike-mi [tʰiɻ.ˈkʰɨmɭ(ɬ)]

シベ方言の 2 音節語幹の動詞も三家子方言と同じように、2 音節目の頭子音が唇子音（w [v] また m [m]）である場合、未完了接辞 -mi が後続すると、2 音節目の母音が消えてその前後の子音が融合することがある。この現象は上表の(1)-(4)の未完了形（太い線で囲んだ部分）を見ればわかる[16]。

[16] なお、完了形でも 2 音節目の母音が消えるが、その前後にある子音は融合しない。完了形の該当する母音が消える理由は Kubo (2008: 134-136)を参照されたい。また、三家子方言の完了形の該当する母音が消えない理由に関しては、王海波（2016）を参照されたい。

ただし、三家子方言とシベ方言の間では、次の点では違いが見られる。

(i) 融合可能な語は、三家子方言の場合、融合した後の形式は普通であり、融合しない形式はほとんど現れないが、シベ方言の場合、融合しない形式と融合した後の形式のどちらもよく現れる。

(27)	三家子	yawe-mi「歩く」	[jaɹ.ˈβ̟im˥˩(˧)]	頻度低	[ja:mʌ(˧)] 頻度高
	シベ	yawe-mi「歩く」	[jaɹ.ˈvim˥˩(˧)]	頻度高	[jam:ʌ(˧)] 頻度高

(ii) 融合した後の形式は、三家子方言の場合、どちらかというと母音の方が長くなる（例えば、yawe-mi [ja:mʌ]）が、シベ方言の場合、どちらかというと子音の方が長くなる（例えば、yawe-mi [jam:ʌ(˧)]）ようである。また、シベ方言の融合した後の形式ではピッチが上昇した後、下降になることも可能である（すなわち、[jam:ʌ] も [jam:ʌ] も可能）であるが、三家子方言では [ja:mʌ] のようなピッチは観察されない[17]。

(iii) シベ方言ではこの場合、2 音節目の母音が a であれば、当該する母音が消えず、母音の前後の唇子音が融合しない。例えば、ciwa-mi [t͡ɕʰiɹ.ˈvam˥˩(˧)]「塗る」は、[t͡ɕʰim:ʌ(˧)] として現れることはない。三家子方言でも同様であろうと推測されるが、2 音節目が wa, ma である 2 音節語幹の例は筆者の調査では見つかっていない。

[2] [ɹ:] の例

チャプチャルのシベ方言では、語頭以外の「l＋高母音」は [ɹ:] のように発音できる場合が多い。例えば、gele-mi「怖がる」は、[gɜɹ.ˈlim˥˩(˧)] の他に、[gɜɹ:mʌ(˧)] のような発音もあり得る。この現象は久保ほか（2011）も指摘している。

この現象においても、2 音節目の子音化が見られる。その結果、1 音節目に強勢が来るようになる。初頭部分はもともとの低いピッチのままであるが、語末の [ɹ:m] の部分のピッチは強勢が移動する前の相対的に高いピッチ（または下降のピッチ）を保っているため、移動した後の形式は低いピッチから始まり、最後だけ高い（または下降の）ピッチになる。

筆者の調査では、「l＋高母音」を [ɹ:] のように発音する現象はイチャガシャンのシベ方言では起こっていない。チャプチャルのシベ方言では全ての話者で起こっているわけではないが、中年以下の多くの話者の発話では起こっている。この子音化の変化が実際に起こった話者の場合、子音化が起こった後の方の形式が普通であり、起こる前の形式より頻度が高いようである（例えば、gele-mi は、[gɜɹ.ˈlim˥˩(˧)] より [gɜɹ:mʌ(˧)] の方が頻度が高い）。

[3] [n:] の例

シベ方言の nane [nan]「人」に与格接語 =de が後続すると nane=de となる。nane=de の発音に関しては、Kubo (2008: 135)は「[nanət], *[nant]」と記述している。すなわち、[nant] のような形式にはならないと指摘している。一方、児倉（2018: 7）は「[nanɤt] ~ [nant]」のように記述しており、[nant] になることがあるとしている。

[17] ただし、三家子方言では語末の i が音声的に実現される場合、[ˈja:mʌ.mʲe˧˥] のような発音になり、2 音節目の [mʲe] のピッチは 1 音節目の [ja:m] の最後のピッチ（上昇の頂点のピッチ）より低い。

(28) (a) nane=de [nanət], *[nant] （Kubo 2008: 135）
(b) nane=de [nanɤt] ~ [nant] （児倉 2013: 7）

筆者の調査では、nane=de は、普通 [naɺˈnɨtɭ(ɬ)] のように発音するが、一部の話者は [naɺˈnɨtɭ(ɬ)] の他に、[nanːtʌ(ɬ)] のような発音も許容する。すなわち、この例には、前述した「l＋高母音＞[ɪː]」と同じような「n＋高母音＞[nː]」の変化が起こったと考えられる。その結果、[ɪː] の場合と同じように、強勢が前に移動する。[na] の部分のピッチはもともとの低いピッチのままであるが、[nːt] の部分のピッチは強勢が移動する前の相対的に高いピッチを保っている。そのため、強勢が移動した後の形式は低いピッチから始まる。決して [nanːtɭ(ɬ)] のような発音にはならない。すなわち、高いピッチから始まる taNde [tʰantɭ(ɬ)]「殴れ」や waN=de [vantɭ(ɬ)]「梯子に」とのピッチのパターンの違いが顕著である。児倉（2018: 7）が記述した [nant] にはピッチの表示がないため、[nanːtʌ(ɬ)] のように低いピッチから始まるのか、それとも taNde [tʰantɭ(ɬ)]「殴れ」や waN=de [vantɭ(ɬ)]「梯子に」のように高いピッチから始まるのか、分からない。筆者の調査では、この例は上述したように低いピッチから始まる。

4.2.3. 音節の消失

4.2.1. と 4.2.2. では三家子方言とシベ方言の音節の子音化の例を挙げている。音節の子音化が起こった後、音節数の減少がもたらされているかという問題があるが、母音が消えて子音化した場合、成節子音であるという積極的な根拠がない限り、音節数が 1 つ減るという解釈が自然であると考えられる。

また、次の例からも、音節数が 1 つ減ることがわかる。4.2.2.の[2]で述べたように、gele-mi「怖がる」は [gɜɺˈlɨmɭ(ɬ)] ~ [gɜɪːmʌ(ɬ)] のように発音することができる。すなわち、gele-mi の le は [ɪː] のように発音することができる。一方、χaNle-mi [χanɺˈlɨmɭ(ɬ)]「溶接する」は [χanɪːmʌ(ɬ)] のように発音することができない。すなわち、χaNle-mi の le は [ɪː] のように発音することができない。gele-mi の le は [ɪː] のように発音できるが、χaNle-mi の le は [ɪː] のように発音できないという現象をどのように説明できるか、という問題が生じる。もし、子音化した後の [ɪː] が独立した音節を成す（成節的）なら、この現象は説明できない。一方、もし子音化した後の [ɪː] が独立した音節を成さない（非成節的）なら、この現象は次のように音素配列論的に説明できる。もし子音化した後の [ɪː] が独立した音節を成さない（非成節的）なら、gele-mi [gɜɪːm] は音声的に 1 音節のはずである。音節末子音（coda）は [ɪ] と [m] という 2 つの子音からなり、どちらも共鳴音である。仮に χaNle-mi の le も [ɪː] のように発音できるとすれば、*[χanɪːm] のように発音するはずである。音節末は [n] と [ɪ] と [m] という 3 つの子音からなり、どれも共鳴音である。シベ方言では音声的に音節末に 2 つの共鳴音が来る例はある（例えば weile [vɜjɪ]「仕事」）が、3 つ以上の共鳴音が来る例は観察されない。したがって、χaNle-mi が *[χanɪːm] のように発音できないのは音節末に 3 つもの共鳴音があるからであると考えられる。上記から分かるように、χaNle-mi の le が [ɪː] のように発音できないという現象は、le が非成節的であることを示唆していると考えられる。

5. 強勢の位置の方言差について

窪薗（1998: 83, 158）によると、日本語の高さアクセントは大きな方言差を示しているが、英語の強さアクセントは大きな方言差を示さない。また、スウェーデン語は高さアクセントと強さアクセントの両方の特徴が独立して現れるが、強さアクセントの型に方言差はほとんど見られないが、高さアクセントの型の方言差は著しいという。高さアクセントより、強さアクセントの方が方言の差異を示さない傾向が示唆される。

一方、満洲語のアクセントは強勢、すなわち強さアクセントであるが、大きな方言差を示さないとは言えない。満洲語の強勢の方言差は次のような 2 つの面にあると考えられる。

[1] 語の強勢の位置

次表は高いピッチから始まる強勢音節の例である。(1)(2)(3)の語の強勢の位置は、三家子方言と黒河方言では 1 音節目にあるが、シベ方言では 2 音節目にある。(4)(5)の語の強勢の位置は、三家子方言とシベ方言では 2 音節目にあるが、黒河方言では 1 音節目にある。

表 3：語の強勢の位置の違い

	三家子方言	黒河方言	シベ方言	語の意味
(1)	wexe [ˈβ̞ɤ:ɣʁ]	wexe [ˈβ̞ɤ:ɣʁ]	wexé [vɜˈɣɜ:]	「石」
(2)	tuili [ˈtʰujle]	tuili [ˈtʰujle]	tyurí [tʰyːˈɾi:]	「豆」
(3)	duili [ˈtujle]	duili [ˈtujle]	dyurí [dyːˈɾi:]	「ゆりかご」
(4)	mukú [muˈkʰu:]	muke [ˈmu:kʰʁ] ~ meke [ˈmɤ:kʰʁ]	mukú [muˈkʰu:]	「水」
(5)	siti-mi [ɕiˈtʰim]	site-mi [ˈɕi:tʰʁmʲe]	site-mi [ɕiˈtʰim]	「小便する」

[2] 強勢の位置が弁別的な機能を果たせるか否か

第 3 節で述べたように、三家子方言とシベ方言では強勢の位置が弁別的な機能を果たす場合がある[18]が、黒河方言では強勢の位置が弁別的な機能を果たさない。

6. いわゆる声調が出現しているか

4.2.3.の[3]で述べたように、tyawe-mi「点ける」は [tʰaɹ.ˈvimɽ(ɬ)] ~ [tʰam:ʌ(ɬ)] のような発音が観察される。一方、tya-mi「点く」は [tʰamɽ(ɬ)] のように発音する。したがって、tyawe-mi「点ける」を [tʰam:ʌ(ɬ)] のように発音する場合、[tʰam:ʌ(ɬ)]「点ける」と [tʰamɽ(ɬ)]「点く」は子音と母音が同様であり、ピッチが異なるという点では、声調に類似する[19]。しかし、次の 2 点の理由により、この現象は声調とは言い切れないことがわかる。

---

[18] なお、趙傑（1989: 73-74）は泰来方言における強勢の位置による対立の例を挙げている。瀛生（1992: 11）と黄錫恵（2001: 17-18）は『清文啓蒙』を踏まえて、北京方言にも強勢音節の位置によるミニマルペアが存在すると主張している。

[19] 高さアクセントと声調の違いに関しては斎藤（2006: 107-109）は次のように指摘している。高さアクセントは「どこ」かという性質のもの、声調は「どれ」かという性質のものであるといえる。共通日本語は語のどこにピッチの下り目があるかが重要なポイントであるため、高さアクセントの性質を示しているが、中国語は幾つかのパターンのうちどれが選ばれるかが問題であるため、声調の性質を示している。ここの [tʰam:ʌ(ɬ)] と [tʰamɽ(ɬ)] のどちらも 1 音節語であるため、「どこ」かが問題ではない。[tʰam:ʌ(ɬ)] と [tʰamɽ(ɬ)] のピッチのパターンが異なるため、「どれ」かが問題である。したがって、高さアクセントより声調の性質に近い性質を示していると考えられる。ただし、本節で挙げた理由により、声調ではないと考えられる。

理由 1：tyawe-mi の発音は [tʰam:ʌ(ɬ)] だけではない。[tʰaɻ.ˈvɪmɭ(ɬ)] の発音もある。[tʰaɻ.ˈvɪmɭ(ɬ)] の場合、[tʰaɻ.ˈvɪmɭ(ɬ)] と [tʰamɭ(ɬ)] の間では子音と母音の違いも見られる。

理由 2：ピッチによる区別がある語は、次の(29)(30)に挙げた例のみである。すなわち、ピッチによる区別があるのはごく一部であり、体系として成り立っていないといえる。

(29) シベ方言の例

(a) tyawe-mi [tʰam:ʌ(ɬ)]「点ける」　tya-mi [tʰamɭ(ɬ)]「点く」
(b) owe-mi [ɔm:ʌ(ɬ)]「洗う」　o-mi [ɔmɭ(ɬ)]「成る」
(c) sime-mi [ɕim:ʌ(ɬ)]「吸う」　si-mi [ɕimɭ(ɬ)]「塞ぐ」
(d) yawe-mi [jam:ʌ(ɬ)]「歩く」　ya-mi [jamɭ(ɬ)]「腐る」

(30) 三家子方言の例

(a) dawe-mi [ta:mʌ]「点ける」　da-mi [tamɭ(ɬ)]「点く」
(b) tawe-mi [tʰa:mʌ]「上る」　ta-mi [tʰamɭ(ɬ)]「見る」
(c) owu-mi [ɔ:mʌ]「洗う」　o-mi [ɔmɭ(ɬ)]「成る」
(d) omu-mi [ɔ:mʌ]「飲む」　o-mi [ɔmɭ(ɬ)]「成る」

上記の 2 点の理由により、tyawe-mi [tʰam:ʌ(ɬ)] と tya-mi [tʰamɭ(ɬ)] の違いは声調とは言えないと考えられる。

7. 終わりに

本稿では、三家子方言・黒河方言・シベ方言の強勢とピッチについて考察した。そして、次のようなことを明らかにした。

満洲語現代方言の強勢音節は高いピッチから始まるものと低いピッチから始まるものに分類できると考えられる。高いピッチから始まる強勢音節は方言によって位置が異なる場合がある。また、強勢音節の位置は三家子方言とシベ方言では意味弁別の機能を果たす場合がある。低いピッチから始まる強勢音節は、強勢の移動によるものと考えられる。強勢の移動は音節の子音化によるものとよらないものに分類できる。

強勢の移動により、声調に類似する現象が生じる。例えば、[tʰam:ʌ(ɬ)]「点ける」と [tʰamɭ(ɬ)]「点く」は子音と母音が同様であるが、ピッチが異なる。しかし、[tʰam:ʌ(ɬ)] は [tʰaɻ.ˈvɪmɭ(ɬ)] のような発音もある。また、声調に類似するこの現象の例はごく一部であり、体系として成り立っていない。従って、声調とは言えないと考えられる。

参考文献

黄錫恵（2001）「満語口語研究的重音問題」『満語研究』32: 17-20.

児倉徳和（2018）『シベ語のモダリティの研究』東京：勉誠出版.

河野六郎（1944=1979）「満洲国黒河地方に於ける満洲語の一特色」『河野六郎著作集 第 1 巻』東京：平凡社.

Kubo, Tomoyuki. (2008) A sketch of Sibe phonology. *Contributions Towards Research and Education of Language Vol 16 Studies of Languages: From the Viewpoint of Eurasian Languages*. 127-142.

久保智之・児倉徳和・庄声（2011）『2011 年度言語研修シベ語テキスト 1 シベ語の基礎』東

京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
窪薗晴夫（1998）『音声学・音韻論』東京：くろしお出版.
斎藤純男（2006）『日本語音声学入門 改訂版』東京：三省堂.
Wang Haibo. (2013) Emergence of the tone system in the Sanjiazi dialect of Manchu. In: Ritsuko Kikusawa & Lawrence A. Reid. (eds.), *Historical Linguistics 2011: Selected Papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 27-31 July 2011*. 101-113. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
王海波（2016）「満洲語口語における音素交替と語幹の境界線について」七科研合同研究会 2015 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会．2016 年 3 月 26 日.
瀛生（1992）「談談満語的京語（六）第七部分 京語的変音和常音」『満語研究』15: 1-17.
趙傑（1989）『現代満語研究』北京：民族出版社.

Stress and Pitch in the Modern Dialects of Manchu

Haibo WANG
(Lingnan Normal University)

Keywords: Manchu, stress, pitch

The stressed syllable in the modern dialects of Manchu can be divided into two types: the one beginning with a high pitch and the one beginning with a low pitch. The position of the stress of the first type may be different in different dialects, and it can distinguish words in Sanjiazi and Sibe. The emergence of the stress of the second type is presumably caused by the shift of stress, which makes the unstressed syllable with a low pitch acquire stress without changing its relatively low pitch. The shift of stress can be divided into two types: the one which is caused by the consonantization of a syllable and the one which is not. The shift of stress may also cause the emergence of a phenomenon very similar to tone. For example, [tʲʰam:ʌ(ɬ)] “to light” and [tʲʰam˥(ɬ)] “to be lit” have the same consonants and vowel, whereas the pitches of them are different. [tʲʰam:ʌ(ɬ)], however, has another possible pronunciation [tʲʰaɻ.ˈvim˥(ɬ)]. And there are only a small number of examples of this tone-like phenomenon, which means that they do not form a system. Thus, this phenomenon cannot be called tone.

（おう・かいは　haibohaipo@163.com）